

歌の新聞



藝術院員に三氏

○さきに高橋誠一郎氏を院長に迎えた日本藝術院では、八月十七日新會員として第二部(文藝)九名を推薦決定した。文藝の九名中歌壇より、吉井勇、金子薫園、太田水穂の三氏が選ばれたことは、慶賀のいたりである。

短歌夏季講座

○新日本歌人協會では八月六、七、八の三日間都立工藝學校に短歌夏季講座を催し盛會であつた。

歌人變遷團體その後

○全國歌人の親睦を圖る目的を以てこの秋結成されることになつた日本歌人俱樂部(假稱)は、この程發起人百八十三名を選定して全國に趣意書を發送する段取りとなつたが、準備委員の意圖する處では入會金一名百圓程度を徴収する外は會費を徴収せず會員の入退會も何らの制限なく自由とする私案の由である。従つて之といふ事業を行ふ事なく、最悪の場合は全國歌人二三千名の住所録を作ると云ふ仕事に終るのではないかと見られ、この點の再検討が促されてゐる、尙内容の詳細は今秋の第一回總會に於て決定するのであるが、一般の要望と

しては、現下の混沌たる歌壇に清彩を興へるに足る意義ある充實せる團體の結成が期待されてゐる。

創刊歌誌

○七月號に發表した以後、本社に連絡のあつた創刊歌誌は次の通りである。

杜鵑花 復刊(埼玉)

勁草 復刊(東京)

米澤短歌 創刊(米澤)

歌苑 創刊(群馬)

オレンジ 再刊(京都)

潮 改題(東京)

「佐佐木信綱全集」の刊行

○佐佐木信綱氏喜壽紀念として全集が六興出版社に依つて出版されることになつた。全十六卷中、新たに刊行されるもの九卷、他の七卷は氏の主著の改訂版である。その第一巻として評釋萬葉集卷一が九月に刊行される。

歌會消息

○定型律短歌會關西大會は八月十五日阿倍野王子神社事務所、後井嘉一氏と幹部同人の西下を得て盛會に行はれた。○八月八日、木更津市主催夏季講座が同市に開催され土岐善麿氏の講演があり續いて同氏中心の歡迎歌會が催された。○花實大會八月二十一日、二兩日神奈川縣大山町に開催、木村拾録氏の講話があつた。○中華民國に抑留中の桂定治郎氏は七月上旬無事歸國されたが、来る十一月を期し、歌誌「聖香子」の創刊に當られる。

編集室便

○激しい暑さも、私達に肉體の疲勞精神の、倦怠を残して、秋風のそよぐ九月になりました。私達はこの夏の暑さに自らを甘へさせはしなかつたでせうか。秋風が冷く頭をかすめる時、ふと何にものかで、淋しい反省を感じさせはしませんか。暑さがきびしければきびしい程、酷寒であればある程、そのやうな自然との苦澁に、われわれの命を刻まねばならないのが人間です。といふことは或は自虐になるかもしれませんが、自分の命をしばり出してこそ、そこに生きてゐる存在が明確に立證させられるからで

○九月號は、特集として「哀傷といふこと」を取り上げてみました。今更古めかしいと思ふ人もありませう。そういふ風に誤解されてゐるところに、哀傷といふ民族の精神が下積みになつておることを考へさせられるのです。現歌壇で感能として考へられるかよはいし難い、總て感傷の域を出ていないのです。現今の世相にこそ、肉體であれ暗陰であれ自虐であれ死影であれ、總べて哀傷としての民族意識を、文藝としてすれない位置で思考することも大切な課題だと信じます。

○斎藤史さんが小説を書いて下さいました。歌人が小説を書くといふことは、歌人が歌壇といふ殻をつき破るといふことの發足のためなのです。(M)

短歌添削

一、自作の短歌の直接指導を求められる方は自作歌十首を「添削歌稿」と封筒に朱書して本社宛郵送せられたい。

一、添削原稿には十首に對し金二十圓の小爲替を添付せられたい。振替貯金にての別送はお断りする。添削原稿は一首一首行間をあけ且つ朱書の餘白を設けて淨書し、返送用封筒(返送先宛名明記、切手貼附)を添付せられたい。

一、原稿には必ず住所姓名を明記して添削されたい。

一、添削原稿は本社編輯部の責任に於て之が添削批評をなし、原稿到着の日より一ヶ月内に返送する。

一、宛名は東京都日本橋局私書面五四號 日本短歌社宛

日本短歌 (第十七卷 第八號)

昭和二十三年八月二十七日印刷

昭和二十三年九月一日發行

價金 參拾八圓

(送二圓)

東京中央區日本橋本町一丁目十番地

發行所 日本短歌社

編輯人 木村拾録

印刷人 吉田信賢

印刷所 株式會社 一色活版所

本誌は半年豫め(前年十二月)に發行を予定し、前回は小爲替又は振替貯金による送金が最も便利でした。

東京中央區日本橋本町一丁目十番地

電話 日本橋二五〇一

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

電話 東京一五八八〇

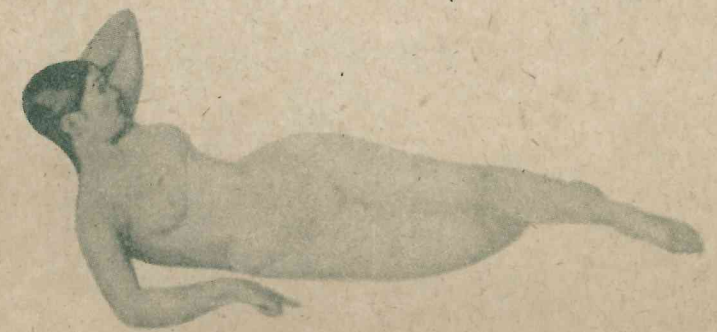
日本短歌

九月號

捨子

富士川のほとりをゆくに、三ッ計なる
捨子のあはれげに泣くあり。此川の早瀬
にかけて浮世の波をしのぐにたへず、露
ばかりの命まつ間も捨置きけん、もとの
秋の風、こよひやちるらん、あすやしを
れんと、袂よりくひ物なげて通るに、
猿を聞人捨子に秋の風いかに
いかにぞや、汝ちゝに憎まれたる歟、母
にうとまれたる歟。ちゝは汝を惡にあら
じ、母は汝をうとむにあらじ、只これ天
にして、汝が性のつたなきをなけ。

芭蕉



募集規定

- (1) 締切毎月末日・投稿者は毎月一回一人短歌五首以内に限り。(2) 用紙は必ず官製ハガキ又は同型紙使用のこと。
- (3) 日本短歌社編集局(責任者木村捨子)において選歌選稿し、その翌々月の誌上に発表す。(4) 原稿には必ず差出人の住所氏名を明記し、誌上発表の形式に則つて添書する。(5) 原稿は如何なる事情あるとも返戻せざること。(6) 原稿は謄写のみ添書し私用通信文は書かざること。(7) 原稿は東京都中央区日本橋本町一ノ十日本短歌社編集局宛。



熱海西山にて

雲を觀水に新しみ山峽のここに三とせの春秋は經し
昨日見つけふ今も見ろ溪の流ながれ暫くもとどまらなくに
あはれなる老い歌人よくものをゆかしめと溪の流は語る
白金の山やゝやゝに朝の光にはひ山峽のこも朝鳥の聲
思ひすてよすべなきものはすべなしと夜の秋雨はふりにふるなり
氷雨また夜に入りてはげしわれにわが憤の思たへがてなくに
憤りの思ひ胸にあり早春の清き月夜に我を悔いすも
外は雨風青磁のかめにさちかうの花しづかにもるみつつあるを

佐佐木信綱

九月號・目次

◆熱海西山にて……………佐佐木信綱(一)
◆哀傷といふこと……………特稿

- 哀傷の精神……………高山 毅(二)
- 短歌の持つ哀傷性……………矢代東村(三)
- 哀傷の文學……………福田榮一(六)
- 詩における哀傷性……………壺井繁治(八)
- 短歌の哀傷について……………泉 甲二(二〇)
- 山 麓(詩)……………田中克己(二三)

哀 傷 歌	
飯岡幸吉	太田青丘
河野慎吾	岸野愛子
倉地與年子	栗原潔子
鈴木幸輔	千田豊子
中村繁子	西村陽吉
服部童村	古田夏子
堀内通孝	松本千代二
丸山忠治	村上新太郎
村田利明	水上唯史

- 短歌の推進するもの……………菱本新平(二四)
- 平福百穂……………三浦常夫(二六)
- 肉體と哀傷と短歌……………岡部桂一郎(二八)
- 詩・石の上に坐りて……………長尾一郎(三〇)
- 静・虚妄の生活……………伊井昭夫(三三)
- 現代の短歌(初墨齋座)……………竹花朔夫(三五)
- 添削歌實例……………河村千代(三六)
- 歌壇現状大観・讀者の箱……………(三六)
- 太鼓(小説)……………齋藤 史(三八)
- 日本短歌詠草……………編集局選(四〇)
- 捨子……………松尾芭蕉・表二
- 特選短歌……………肥田 敬等(表三)
- 歌の新編・編集室便……………(表四)
- 表紙:今井繁三郎・カット:上野・田中

死にたまふ母』の一連からその内容を梗概するとおもはるる四首をぬいたのであるが、ここにも一つのぬきさしならぬ哀傷がある。『すべなきか螢をこるす手のひらに光つふれてせんすべはなし』、『ほのぼのとのおれ光りてながれたる螢を殺すわが道くらし』。これは『悲報來』と題する一連の、師左千夫逝去の悲報來に、赤彦の宅をさしてはせんずる茂吉じしんの描寫の二コマであるが、この哀傷もとりあげられる。浪漫主義作品にしろ、寫實主義作品にしろつづまりは即きつ離れつづあるにしても短歌は抒情に歸一されてゆくべきもの、哀傷の人間の本來的の基盤のものたるを語るにほかならない。手とりばやくいへば、浪漫とした寫實風の作品と寫實性を基底とした浪漫風の作品といえないこともなからう。さいきんの若き世代的短歌作品が、その對象のつかみかたにおいて思想的、知性的、心理的になりつつある、それは多少とも懷疑をともなつてゐるとはいへ、新しい意欲のもとに展開され、實作されつつあることはまぎれもない事實であるが、さうした短歌作品が、依然として短歌の定型律により短詩型文學たらしめようとする以上、その發想過程にいちど感情の洗禮をうけなければ作品たりえないことは自明の理であらう。しかるに、この感情の處理に關して彷徨するかに見えもし、また故意に感情を抹殺する形態を、どちらかといへば誇示するかに見えまするより若き世代的作家群があり、作品の氾濫を見つづることが指摘される。『前方へ我を押しやる荒き鞭しなやかな鞭を幻覺すけふも』(大野誠夫)、『行動のすれに立つとき鳴りとよむわれの

泉よ澄みまされざれ』(坪野哲久)、『傍觀し得る聰明を又信じ再び生きむ妻と吾かも』(近藤芳美)、『願ひつつ何時新しき明日ありや瘦れし夕べ汽車に眼を閉づ』(狩野登美次)、『未完成岸壁を嚙む白波のかぎりも知らに痛むころはや』(山本友一)などは、一つの例にすぎないが、いづれも今日の若き世代的旗手として、すでに一家の風格を買はれ、活潑に作品行動をしてゐるひとたちの作品であるが、これらの作品群の指向するところは、かなり在來的なものとは質を異にしてきてゐる。しかし、ここに抜いて來た作品は、それがたとえ思想的、知性的、心理的傾向の作歌理念をもつてゐるにしても、一應十分に鑑賞にも批評にもたえうるといふことは、一見變貌するかにみえはしても、感情の濾過を経た一つの哀傷が基流してゐるからだと思ふ。いひたいのは短歌は人間復興、個の生命の振幅する限界にあつて底流する本來的な孤獨を開花させるやうな作品でなければならぬことである。この段階に、短歌における哀傷性はさらに質的展開をとげてゆく。結論をいへば、哀傷は短歌の消ゆることのない體臭である。その體臭も、女身の擬裝された脂粉の、香油の、あのいんちき臭であつてはならない。人間そのものの肉塊からにじみ出てくるにほひでなければならぬ。

わが兒、わが妹よ、夢にもみよ、かの國に行きて、ふたりし住まん。のどけさを愛し、愛して死なん。きみにふさはしきその國は、ものみな、ただ秩序と美と豪華と快樂。歲月にふるめきたる調度もて、われらが部屋を飾らん。龍涎香のかぐわしき香りは立ちこめ、世にも珍らしき花も咲かん。東方の莊嚴と綺羅は集まりてあり。見よ、この入江に眠りたる船あり。漂泊の旅の心を乗せてゆかん。そはきみが麗はしき慾望を満たすために、世の涯より來りし船なり。沈みゆく日は野邊も入江も、隈なく時も紫金色に染めて、世はその熱き光明のただ中に眠る。

これは、ボードレルの詩、『旅への誘い』の大意であるが、これに取材したアンリ・デュバルク(Henri Duparc)の少歌『歌曲の中の代表作』(『旅への誘い』(Invitation au voyage))こそ、純粹と單純のなかに、しかもふかく複雑で豊かな感情をたたへてゐる、まれに見る甘美な哀傷の音楽である。哀傷はたんに短歌の體臭のみではなく、また詩の體臭でもあり、音楽の體臭でもあり、あらゆる藝術の體臭でもある。

★現代大家印象記★

茂吉	五島	超空	細川
空穂	岩田	信綱	東原
善磨	木俣	榮舟	渡邊
英一	山本	順	竹内
勇	小高根	夕暮	香川
文明	近藤	水穂	森田

短歌の新人へ……… 結城 章 果
次の新人へ……… 岡部 直七 郎
山田 あき 論……… 都 築 省 吾
歌 物 神保 光太郎・杉 浦 伊 作
現代の短歌(初學講座)……… 結 城 健 三
作品 吉田 正俊・岩間 正男・津田 章一 郎
服部 直人・平野 宣紀・他十五氏
特選短歌……… 日本短歌詠草

己 克 中 田 麓 山



こゝにゐると西と北だけがひらけて
そこでさまざまの營みもよその世界のやう
遠い都會のことはめつたに聞えて來ないが
けふ古い友だちが死體になつて發見したことを聞く
せまい用水の梅雨の水かき
やつととげた思ひがあはれでならなかつた
自分も生きる楽しみをもたないか
このかなしみはどこから來る？
夕日を見ながら考へあぐね
爪をきり髭を剃り行水を使つて
おもむろに夜のふけるを待つ
この一日が自分の一生の象徴か

平福百穂

夫常浦三

平福百穂は近世日本繪畫史上に不朽の業績を遺した巨匠的畫人であつたが、それと同時にアララギ派の優れた歌人でもあつた。

百穂は其の全生涯の畫業に於て、寫生の重要性を強調した。彼の意味する寫生とは、對象の視覚的眞實を表現すると同時に、對象の精神的眞實をも把握するものでなければならなかつた。單純に對象の視覚的眞實のみを追求することは、普通これこそ寫生であると考へられてゐるが、それは寫生の一面たるにすぎず、のみならず精神的眞實を忘れることによつて惡寫實に陥るものである。これに反し精神的眞實のみを追求して視覚的眞實を閑却するならば、これも寫生の本道をはずれるものであり、繪畫藝術の邪道を行くものとなる。要するに繪畫藝術の眞髓は寫生にあり、しかも其の寫生は對象の視覚的眞實と共に其の精神的眞實を渾然と表現すべきであると彼は考へた。

初は左千夫や節の指導を受けた。百穂の畫業が寫生に基礎を置くものであるやうに、彼の歌もまた寫生を其の基調とした。

ここに於て岩鷺山のひむがしの岩手の國は傾きて見ゆ

と云ふ初期の代表作は、すでに専門歌人も到底及ぶ能はぬ觀察の深さと表現の確かさを示してゐる。明治四十年北海道に旅して「アイヌ」の傑作を描いたが、この時の歌もやはり優れたものである。

天さかる釧路の國にならび立つ雌阿寒の山雄阿寒の山

谷地原の釧路の國はほろほろに葦原が上に雲垂りて居り

無聲會は大正二年自然消滅した。この後百穂は從來の自然主義に飽き足りなくなつて畫風を一變した。これまで百穂は専ら庶民の現實生活を寫生的に描いて來たのであるが、この後はやはり寫生を根柢としながらも、一方では宗達の「たらしこみ」の技法を復活して裝飾性寫實を相即せしめた花鳥畫や、新南畫風の山水畫、あるひは神話傳說に取材したロマン的な人物畫を描いた。ある意味では百穂は其の青年當時の革命的氣魄を失つて、保守的に後退したのだと云へるかも知れないが、しかも百穂が藝術家として大を成したのは實に此の時代である。しかも此の時代は彼の作歌活動の最も旺盛な時期でもあつた。大正三年の制作になる「鴨」は彼の出世作となつたが、彼はまた鴨を題として一聯の聯作を作つた。

水禽の鴨はうれしをもんどの羽色はてりて石のうへに居り

明治三十二年、美校を卒業したばかりの百穂は先輩の結城素明らと共に無聲會を組織し當時岡倉天心の下に集つてゐた横山大觀、下村觀山、菱田春草、寺崎廣業らの日本美術院の理想主義的ロマン主義的美術運動に對抗して自然主義を高唱した。

自然主義と云へば吾々は直に島崎藤村、田山花袋らの散文學界に於る其れを想起するが、實を云ふと無聲會の方が藤村花袋らに先行すること數年である。しかも百穂は同じ無聲會の會員の中でも最も尖鋭的な革命的な作家で、當時の彼の作品は全く自然主義の精神に徹底したものであつた。彼は好んで農民、勞働者、ルンペンを極めて寫實的に描き、貧民街や工場の光景を寫生した。彼の畫題は常に庶民の現實生活から取られた。それは日本美術院の作家たちが描くロマン的な神話、佛傳、歴史に取材した畫題とは全く對蹠的なものであつた。

枇杷の木に日のかげれば霜柱さくさく踏みて鴨ら遊ぶも

この頃から百穂は好んで松の樹を描いた。落の葉もしばしば畫題にした。複雑な人事的なものが嫌はしくなり、單純な自然に深く沈潜して行つた。すべての東洋人に其の傾向があるやうに彼は老年に近づくにしたがつて自然に復歸して行かうとした。それは何か宗教的なものに近い氣持であつた。

野のまなかの一本松に光射し赤々と立つ夕そら明り

ふきのたうを縁の日向に目守り居つ今年はよき繪かかむと思ふ

しかも畫業の上では「豫讓」「伏魔」「丹鶴青瀾」「荒磯」「堅田の一体」「蓮華寺和尚」など數多くの傑作を描いたが、その多方面多角的な創作活動は、自然に對する敬虔な感情と深い透徹した觀照に裏付けせられた寫生の精神を其の源流とするものであつた。特に昭和五年の洋行の後、自分の藝術について深い自信を獲て、その自然觀照の藝術はいよいよ深く研ぎえたものとなつて行つた。

大正の始め左千夫と節とに死別して後、百穂は専ら島本赤彦、齋藤茂吉に歌作の指導を受けた。彼の短歌は人生の現實を透徹した觀照を以て、淡々と素朴誠實に歌つたもので、時には平淡にすぎて物足りなく思はれる場合もあるが、深い感動を客觀的にさびなく歌つたある種のものは齋藤茂吉も自ら及びがたしと告白してゐるのである。

生垣をくぐりていゆく孕み猫土に腹すりくぐり

明治三十六年、日本最初の社會主義新聞たる平民新聞が幸徳秋水、堺利彦らによつて創刊された。百穂は幸徳らの依頼によつて同紙の挿繪を描いた。日本に始めて労働組合が出来たのは明治二十九年、日本社會民主黨の結成が同三十四年である。當時我國では近代的な資本主義體制が漸く整ひ、新興の資本家的市民階級は濃刺と上昇しつつあつたが、それと同時にプロレタリア階級が發生した。プロレタリア階級の發生と共にプロレタリア的な、あるひは少くとも前プロレタリア的意識も發生した。無聲會の自然主義運動は此の經濟的社會的基盤の歴史的発展と決して無關係である筈はないであらう。

それは花袋藤村の自然主義についても同じことは云へるであらうし、正岡子規、伊藤左千夫、長塚節らの短歌に於る寫生主義運動についても恐らく或る程度同じ關係が認められるのではないかと思ふ。したがつて繪畫、散文學、短歌と夫々領域は異なるにしても、其の間には何か共通した思想の親近性が感ぜられた。事實百穂は一方では花袋、藤村らの小説などに挿繪を描いたこともあるし、特に左千夫や節とは親交を結んで後には自らアララギ派の寫生主義短歌を作るやうになつてゐるのである。繪畫に於る無聲會の自然主義、散文學に於る花袋藤村の自然主義、短歌に於る左千夫節の寫生主義——これらのものは、いづれもプロレタリア階級の發生と何らかの關係を持つものである。總括して云へば日本に於るレアリズムの系列である。

百穂が始めて歌を詠んだのは明治三十九年で最

けるから
大き浪うねりをうちて若布刈るあまをとめにかがやき散るも

吾が兒等はつむり並べて寝ね居らむ暗き小徑をひたに歸るも

蟬のこゑにはかに止みて山峽の夜明けむとする狭霧のうごき

ひたぶるにいのちは愛しいまはただ呼吸をしづかに麻薬の嗅がむとす

たまゆらのあやふさいのち免れえし子の幸おもひひたにありがたし

大波止のあかるき街の人ごみにあはれ異國の捕虜も居たりき

枯草を焼きつつ心さぶしかりはるけき道に思ひ至るも

天の原仰ぎかそけき夕あかり腹ぼのしるく渡る鳥あり

ひそやかに吾がさ庭べに來て居りし小猫はあはれ青草を食む

この道にひたすらにして年月をへにけむ君が眼のほころび

兩國橋を渡りて來れば川下に曇り吹雪暗らす風早みか

わが兄の斃れし原に日は暮れてきびしき凍りいたりけむかも

旅人のわれにさぶしもおのづから柳の絮は空に飛びつつ

このままに訣れとならんひとときに溜る涙を雨と零らせり

「ふざけんな。」

云ひながら、ぞうりをつつけて庭へ出た。よし二は、もろこしの根方にしやがんで居る。

「石なんか、投げるな。いくつになつて、あたく（いたずら）する！」

「ふん」

「今度やつたら、がまんしねえ。おれの方が年上なんだで。」

「へえ、たつた二つよ。」

よし二は笑ひながらぬつと立つた。かのよりもずつと高い中の胸がはだけられて居て、彼女をなにか、ガンと云はせた。

「行くか？」近々と顔を出して聞く。

「なにさ。」

「踊りよ。おめえ、ゆふべ北の村まで行つたらうが。」

「知らねえ。おら。踊らねえで。」

「ふうんだ。」

「やあだ。奇妙なもの云ひ方して。」

よし二は暑そうに浴衣の袖を肩までまくり上げる。兩腕とも。——眼の前で固く黒いのは、もろ

こしの葉だけだと、かのは思おうとする。

「今夜から、田んぼ向ふでも始めたぜ。」

「ああ、盛るだらう。」

「行くか？」

「知らねえ。おら。」

よし二は、たしかめるように、じつとかの眼を

探る。

かのは黙つて居る。

よし二は、いきなりびしやつと二の腕の紋をた

たく。

「なぜ踊らねえんだ。おめえ。」

かのは答えない。眼を伏せる。そのくらのかけひきは、彼女にだつてある。

太鼓がきこえる。風に飛つてひときわ近く。

「早く出かけなさいよ。もう始つてる。」

かのは、くると背を向けて、もろこしのそばを離れる。

「十時から先さ。面白くなるのは。」

よし二も、かきねを離れる。向ふへ向きながら、何気なく云ふ。

「おれ、今夜は、田んぼ向うだ。自分の部落なんてきうくつだからね。」

かのは、また聞かないふりをする。

よし二の下駄の音が、遠ざかつてゆく。かなぶ

んが一匹、部屋を明りを目がけて来て、かのの服の胸につき當る。彼女はそれをものと、足元

へたたきつける。ばしつとそれは乾いた土の上へ、へたばつた。

遠ざかつて行つた下駄の音が、ふと立止つた。いんとする。と、急に、さわさわといふびきが

おこつた。かばちや畑のあたりである。その廣い

厚い葉の上に、人間の放出する液體がふりかかる

音なのである。

若い、ゆたかな健康なその液體の、小氣味よく

ほとばしる音を聞いてみると、かのは、我にもな

く、微笑へて来た。

ひとりでに、に、と、濃く、胸底から、わらへ

るのである。

かのは、それから上へ上ると村の農業組合で買

た。よし二は、知らん顔をしている。かのも、もちろんのことだ。

更に新しい数人の男が、どこかかと加はつて、

かのとよし二の間が隔てられた。

うき立つた踊り手たちは、もう音頭の歌だけに

はついて行かない。間の手に勝手なはやしを入れ

れ、突如として勝手な歌詞をうたひ出す。擴がり

すぎた踊りの輪の、あちと、こちらとでは、少

しづつ速度のすれに歌を、わめき合つてゐる。や

ゝ勇氣のある一人の若者が、歌の最初の文句を張

り上げて歌ひ出すと、忽ち周囲の数人が聲を合せて、

急にそこからまた新たな歌ひ出しが始まる。太鼓が、

何とかしてみんなの調子を揃へようと、

いつそ力をこめて、打込んでゆく。

むすめ島田に、蝶々がとまる

(ドオシタ、ドオシタ)

とまるはずだよ、とまるはずだよ

花ごよもの、花ごよもの

とどんこ、とどんこ。

そばの、うたい婆が、そばの、うたい婆が邪魔

になる、邪魔になる。

よし二が、向ふの方で、歌詞をわざわざ變へ

て、ごうたれ爺が——と歌ふのがきこえて来る。

そして、彼は、いち度列を抜けし出、間の数人の

男達をやりすごしておいて、かののすぐ前の位置

にふたゝび入りなほした。

かのは、微笑へてくる。かぶつた手拭のかげで、ひとり

で、に、と、わらつた。

だが、かのは、ころあいを知つてゐる。人々よ

つて来た三圓の「汗しらす」の袋を切り、その白い粉を脇から腰廻りにまき、ばたばたとたたいて、これも組合で買つておいた新しい焼杉の下駄を、勝手のがりぐちに向ふむきに揃へた。

○

かのは、とうとう踊りの輪に入つた。手拭をふ

かくかむつて、うつ向いて、前の人に振り揃へ

た。はじめは少し心もとなかつた足どりが、三度

目の歌あたりから、びたりと調子に乗つた。前の

人も、横も、うしろも、太鼓に合わせて、どんどこ

どんどこと同じ手振り足取りで前進し、また一足

下り、ゆれながら進んでゆく。聲自慢の氣取つた

調子が、やぐらから歌ひかけ、胴間聲の多くの男

聲が、踊りながらこれに合す。ふしも振りも單純

で素朴に、何百邊でもくり返してゆくのである。

よし二は、來てゐるのか、いないのか、薄暗い人

ごみではわからない。或は、ずつと中心の方で踊

つてゐるのだらう。人の輪は、ゆつくりと左へ廻

りながら進む。かのの前後にも、それから何人も

が新しく入り、輪はいよいよ大きく擴り、調子づ

いて來た。始めは隅の方にあつた何かの小さいほ

こらが、行進の邪魔になり出し、今はもう人々

は、ほころのうしろを廻つてゐる。

氣がつくと、いつの間にか、よし二がかののす

ぐ前に入つて來てゐる。彼女の前に伸ばした手

の、一尺とははなれない先で、彼の巾廣い背中

が、手の動きにもなつて揺れ、追ひ、ななめにな

る。

はばんの、ばん、と手をたたいて、あとに下る

とき、彼の振り下げた指先が、かのはとぶつかつ

(二十七頁より) ひとときに芽ぶきたち句ふみちのくあかるき春にあひにけるかも

けふのよひ燈籠に灯をいれにけりあたりほのか

に草のにほひす

年老いておのづからなる足乳根の尊くおもほゆ

いまは世になし

冬池にひそみ動かぬ鱗はこのころものうき吾に

かも似る

百穂晩年の藝業には「刈草」「高原」「春の山」

などがある。花鳥畫にも優れたものが少くない。

それは深い透徹した自然觀照の藝術であると同時に、

また百穂の素朴誠實な、仁侠心に強い、正義

觀念のはつきりした人格の藝術でもある。イデオ

ロギー的に云へば晩年の百穂はむしろ反動的にな

つてゐたのかも知れない。しかし藝術の場合では

イデオロギーが最後のものではない。觀念的には

非常に進んだ人でも、その作品が一向つまらない

人もあるし、イデオロギー的には保守的であつて

も藝術家として立派な人だつてあり得るのであ

る。百穂の晩年の作品はイデオロギーの如何にか

かはらず、人を感動せしめる。或る若い左翼の洋

畫家は百穂の藝術を非常に高く尊敬してゐるが、

それは決して偶然のことではない。最後のものは

人間であり、誠實である。新しい言葉で云へばヒ

ューマニズムである。

百穂の遺した一つの問題がある。それは彼が青

年時代に描いた労働者や農民の生活をもう一度日

本畫の畫題として採り上げ、クールベーの「石割

り」やミレーの「落穂拾ひ」のやうな傑作を描く

こと、これである。